

あたたかい子
かしこい子
たくましい子

学校だより

つよし

—第43号—

令和4年3月7日
平戸市立津吉小学校
文責 校長 田川定司

「まどめの春」

日本選手の活躍のニュースで沸いた「北京オリンピック」も終わりました。しかし、オリンピックにも勝るとも劣らず努力している姿と情熱を学ぶことができる「北京パラリンピック」が3月4日から始まりました。ぜひ時間をとって観戦し、選手たちの姿に学んで欲しいと思います。

さて、いよいよ1年間のまとめである3月を迎えました。学校では、子供たちの学力をしっかりと育てるとともに、人として大切な「心の育成」にも重点を置いて指導を行ってきました。道徳の時間だけではなく、全教育活動で「豊かな心」の育成に取り組んでいます。また、児童の学校生活のあらゆる場面において、善い行いや考え方を賞賛したり、必要な時には言動に対し厳しく指導したりすることを心がけ、人の気持ちが分かり、思いやりのある「あたたかい心」の育成に取り組んでいます。

人としての基盤を作る時期が小学校時代です。



人の心が分かり助け合う子の育成

校長室前ろう下に、下記のような金子みすゞさんの「大漁」という詩を掲示しています。

『大漁』
朝焼小焼だ
大漁だ
おおばいわしの
大漁だ。
浜はまつりの
ようだけど
海のなかでは
何万の
いわしの
とむらい
するだろう。

人間の立場で考えると大漁は幸せなことですが、いわしにとっては悲しむべき事態です。金子みすゞさんの詩「大漁」には、両方の立場、違う視点で考えることの大切さが込められています。桃太郎にやっつけられた鬼の子どもたちの気持ちを代弁した広告が一時話題になったこともありました。鹿児島県には「一方聞いて沙汰すんな」（一方の言い分だけ聞いて判断しない）ということわざもあります。

新型コロナウイルス感染症拡大は、3年近くも私たちの日常の生活を奪い、我慢を強いる場面が多くなりました。その一方で、自分だけでなく人のために感染予防に努める「共助」の心を育み、窮屈な生活の中から感染症に立ち向かう知恵と工夫を生み出しました。予測困難なこれからの時代を生き抜く子供たちにとって、今を精いっぱい生きることの大切さや、人と助け合い協力することで、みんな幸せな社会を作ること学んでほしいと思います。

